

一家で3人も犠牲者が…

戦前・戦中の治安維持法、戦後のレッドページ

2018年、晩秋のある午後、わたし友雄が妻満代と二人、自宅リビングでくつろいでいた時、新聞を読んでいた妻が突然「あなたこの人、叔父さんじゃない?」と驚いたように声を上げた。見ると11月11日付の『奈良民報』だ。「未来へつなぐ!! 抵抗の群像」のコーナーにわたしの叔父(父の弟)林三郎が写真入りで掲載されているではないか。記事の内容は1920年代末、叔父がおもに織維労組でオルグ活動に従事し、1931年日本共産党に入党したこと、32年から3年間、治

わたしたちは、林三郎の姪めいと甥おい
1、叔父・林三郎のこと・・①

林直子・友雄姉弟きょうだいが語る 林家の人々



奈良県版
特別号

2021年7月15日

治安維持法犠牲者
国家賠償要求同盟
奈良県本部
〒630-8442
奈良市北永井町277-3
田辺実気付
☎ 0742-61-7194
振替 0990-2-209460
治安維持法国賠同盟
奈良県本部

われわれの運動の基本

- 一、治安維持法体制の復活に反対する
- 二、国は、治安維持法が人道に反する悪法であつたことを認めること
- 三、国は、治安維持法犠牲者に賠償を行うこと

安維持法違反で奈良刑務所に服役したこと等、生前の叔父の党生活の概要が綴られていた。わたしたち姉弟は、林三郎の姪と甥なのだ。

林家4人兄弟の長男である父一雄から、2男征一を除く弟たち2人が戦前、日本共産党員として活動していたことは聞かされていたが、記事にはわたしたちの知らない事実がいくつか記されていて、とても興味深く読んだものである。

明けて2019年1月14日、わたしは「橿原市9条の会」の活動の一環で、新成人に対する反戦・平和啓発運動として市内の県文化会館前でビラ配り、シール張りに取り組んでいた。その時、取材に来られていた

記事の人物が叔父であることを告げたところ、それが治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟奈良県本部会長・田辺実氏に伝わった。田辺氏は、林家に兄弟で二人も治安維持法の犠牲者がいることに驚かれ、その革新的意義を後世に伝える重要性を強調された。

1989年5月8日第三種郵便物認可 2021年7月15日「不届」NO 565付録

2021年7月15日「不届」NO 565付録

未来へつなぐ
抵抗の群像

林三郎

奈良刑務所に3年服役

『奈良民報』2018年11月11日号



叔父・三郎（1907～71）の活動を『奈良民報』から要約すると、高等小学校卒業後、父や兄・一雄らとともに印刷業に従事するが、弟・茂とともに家を出て、1928（昭和3）年、日本労働組合同盟和歌山労働者組合に参加。1930（昭和5）年、全協（日本労働組合全国協議会）日本纖維労働組合オルグとして東京・八王子で活動する。同年末、全協日本纖維和歌山支部を組織し、委員長となる。1931（昭和6）年11月6日、東和歌山駅（和歌山市）で逮捕され那賀郡岩出署に留置中に脱走、大阪で活動を続けた。

大阪では、全協日本纖維大阪支部長として活動した。『特高月報』（昭和7年12月号）によれば、1932（昭和7）年8月1日、大阪市で治安維持法違反

で検挙され、9月13日起訴された。違反容疑は1931（昭和6）年10月7日に日本共産党入党し、全協日本纖維和歌山支部内フラクションで活動したこととされる。翌年11月21日、和歌山地方裁判所で懲役5年の判決を受けて控訴。大阪控訴院で懲役3年の判決を受けて、奈良刑務所で服役する。

出所後、和歌山労働者組合再建のために活動した。叔父・三郎の活動は際立つて激しかったようで、特高に捕らわれ大阪築港警察二階の取り調べ室から、落っこち途中、電柱の支線に鼻を引っかけ、もげかけたことがあつたと、父から聞いている。この一事をとっても気性の激しさは想像に難くない。『奈良民報』の記事では、逮捕後に那賀郡岩出署から脱走したとあるが、同一の事件なのだろうか？



「林直子・友雄姉弟が語る林家の人々」の特別号発行にあたって

「奈良民報」の「抵抗の群像」欄が「ご縁」

「奈良民報」

「林直子・友雄姉弟が語る林家の人々」の特別号発行にあたって

「林直子・友雄姉弟が語る 林家の人々」を語つていただくことになったのは、『奈良民報』に和歌山県の治安維持法犠牲者で奈良刑務所に収監された《林三郎》さんが掲載されたことがきっかけでした。

その後、林直子・友雄《きょうだい》（から）『奈良民報』の記者に、「林三郎は、私たちの叔父です」と連絡があり、これが私に伝わりました。

林《ご》姉弟にお話をうかがうと、林家には治安維持法犠牲者が親族に2人、姻族に1人、知人に1人おり、さらに戦後もレッドページによって、父上が勤務先を解雇されたことがわかりました。

そこで国賠同盟としては、林家の鬪いの歴史を後世に残すことの重要性を痛感し、詳しいお話をうかがうこととなりました。

そこで国賠同盟としては、林家の人々の歴史を後世に残すことの重要性を痛感し、詳しいお話をうかがうこととなりました。

2021年5月15日

治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟

奈良県本部会長 田辺 実

林友雄さん（前列右）
林直子さん（前列左）
田辺 実（後列右）
THE KASHIHARAにて
2019年2月5日

3、叔父・林三郎のこと・③

和歌山の先輩と
奈良刑務所で会う

日本共産党和歌山県委員会初代委員長の楠山通（1901～79）は著書『不屈のあしあと—ある金属労働者の回想』で、獄内で林三郎に会った時の様子や楠山が派出所してから林家を訪ねたときの様子を次のように書いている。

「……」の新入りは一体誰であろうかと注意を集中した。そして数日後、運動係と担当とボソボソ話しながら通り過ぎる男の声に確かに聞き覚えがあつた。頬っぺたの膨れた人によくある含み声であった。巡回の担当をやり過ごしながら運動の帰りを待つた。『さぶやんや』私は危うく彼を呼び止めるところだった。正しく林三郎であった。……

終戦後間もなく、直子は父と姉の篤子と3人で和歌山の三郎宅を訪ね泊したことがある。叔父は大きな倉庫のような建物に住み、何人かの人を使って仕事をしていたことは覚えているが、仕事の内容は分からぬ。砂地の畑でさつま芋を掘らせてもらつたり、自転車に篤子、直子姉妹を乗せてくれたり、思い出は断片的である。だが、6・7歳だった直子が感じたのは、自転車の前にいた時、父と同じ匂いだったのである。戦後、三郎は結婚し3児をもうけたようであるが、三郎の妻がある宗教の熱心な信者だったので、わたしたちの父とは疎遠になつた。1971（昭和46）年、三郎が63歳で死去したときには、父はガンで闘病中であったこともあり、わたしたち姉弟2人が葬儀に参列した。

1989年5月8日第三種郵便物認可 2021年7月15日「不屈」NO 565付録

2021年7月15日「不屈」NO 565付録

「……幾日かたつて、散髪の時間待ち

している所へヒヨックリ三郎が来た。『オツ』『オツ』。数年ぶりに会う男同士の挨拶であった。林とは同じ和歌山育ちである。先輩雪下健三が村瀬の所へ『この児頼むワ』と置いていつたのが彼がまだ十七、八才の頃で、彼の一生を台無しにした不幸（？）な始まりであつた。家

は典型的な零細企業の街の小印刷屋。姉婿の前島がクリスチャンで、初期労働運動時代の友愛会に関係していたのがこの一家の病みつきかも知れない。二人の兄弟、一人の妹も何と言うことなしに昭和初期のプチブルにありがちなプロレタリア文学運動にかかわりを持つていた一家で、勝気なお母さんというのも、何とはなしにそんな運動に好意を持つていたようである。しかし彼と私の間には、闘争の上でかかわり合いはなく、和

歌山での後輩という程度であつた。』動かして自営業するその頃の典型的なプチブル家庭だつた。翌日もう一度彼の家を訪れた。もう話はなかつたはずなのになぜだろうか。本当は、初めて会つた林の妹の政子にもう一度会つて見たかったのである。彼女は林に似て、赤い頬っぺたを膨らませたのが魅力的だつた。しかし再訪はしたもの、老父母との話が弾んだだけで、政子とは話の糸口もほぐれないまま帰路についた。』

「……（一九三四四年七月、刑期満了に

より出所）郷里和歌山の家にたどり着いた。父母は林健在の報告に大変喜んでくれた。林の一人の兄弟、一人の妹も額を寄せて私の話に聞き入り、もの三時間も話し込み林との獄中での約束を果たした。』

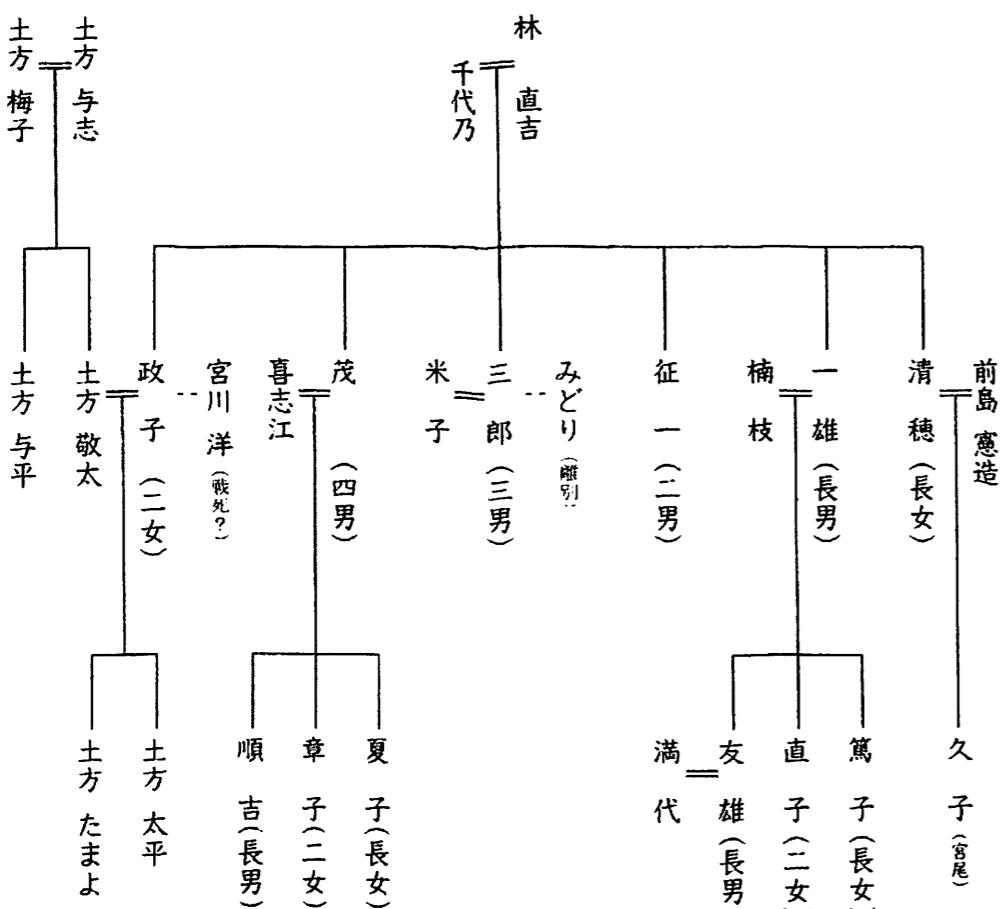
「林の家は、林の兄弟三人で印刷機を運動時代の友愛会に関係していたのがこの一家の病みつきかも知れない。二人の兄弟、一人の妹も何と言うことなしに昭和初期のプチブルにありがちなプロレタリア文学運動にかかわりを持つていた一家で、勝気なお母さんというのも、何とはなしにそんな運動に好意を持つていたようである。しかし彼と私の間には、闘争の上でかかわり合いはなく、和

歌山での後輩という程度であつた。』

4、叔父・林三郎のこと・④

父と同じ匂いがした三郎叔父

林家 家系図



5、林家について

果は「不忠もの、非国民を生みやがつて」と、署から蹴り出されたそうである。

祖父、孫の釈放を
警察署に要求

わたしたちの父方の曾祖父・林重次郎春政(春政は字名)は江戸時代末期、紀州藩士で京都所司代勤番(現代の出向にあたるか)を命じられ、新撰組等と共に勤王派の探索などに従事していた。ものと考えられる。一方、曾祖父は祇園でも遊んだようで「♪♪……あの」よし、「この下駄の歯の減らぬ間に」などと芸者「よしの歌も残していると父から聞いている。

重次郎の長男・直吉は、1932(昭和7)年ころと思われるが、息子のうち一人(三郎か茂かは不明)が逮捕されたと連絡を受け、近衛兵時代に奉戴した有らん限りの勲章をぶらさげ、警察署へ出掛け行き釈放を要求した。結果

(長女清穂、長男一雄、2男征一、3男三郎、4男茂、2女政子)に恵まれたが、3人の男児のうち2男を除く2人が非法の党活動に従事したため、随分肩身の狭い思いをしたであろう」とは、祖母千代乃是晩年、長男一雄のもと

に身を寄せ、1952(昭和27)年暮れに死去するまで檍原の地(後述)で暮らした。厳しい性格で、わたしたち孫に対する躊躇も決して甘くなかった。

林家は戦前、小規模な印刷業を営んでいた。祖父直吉が、大正時代に自宅を改造成して印刷業を始めたと聞いている。その後、長男一雄、3男三郎、4男茂が携わるという典型的な家内零細企業だった。ただ、場所は和歌山市小松原通3

丁目で、日赤和歌山病院の前の人通りが多いところだった。

奈良県出身で戦前からの活動家、石垣(上田)スエノは『抵抗の群像』第三集

(治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟編)に、林印刷屋について次のように書

く残している。

「……一七歳のとき、日赤奈良県の看護婦養成所に入学。日赤和歌山で看護婦と産婆の免許をとりました。その当

時入院患者の井口という和歌山高商の学生さんから小林多喜二の『蟹工船』や

『不在地主』などをすすめられました。……また病院の前に林という印刷

屋さんがあり、学生や労働組合の人達が出入りしており、私も出入りするようになりました。和歌山署の特高係に

尾行されるようになり、ついには婦長が

『勧告』という形で退職をせまられ、

た。……また病院の前に林といいう印刷

屋さんがあり、学生や労働組合の人達が出入りしており、私も出入りするようになりました。和歌山署の特高係に

尾行されるようになり、ついには婦長が

『勧告』という形で退職をせまられ、

た。……また病院の前に林といいう印刷

私は日赤を退職することになりました。……と、学生や労働者が出入りする、昭和初年の林印刷屋のようすを活写している。

また、『奈良民報』の記事にもある通り、石垣(上田)スエノは1932(昭7)年、和歌山県御坊町の日高紡績の寮母だった一時期、林三郎との交流があつたと伝えられている。

6、父・林一雄のこと・①

と2女直子の名は、それぞれ2人の文豪から一字ずつ拝借したものなのだと。また、新しき村時代の友人・小国英雄(1904~96)、脚本家、映画監督。黒澤明監督と組んだ映画『七人の侍』は特に有名)とは戦後も長らく厚誼が絶えず、度々祇園から呼び出しを受けていた。

和歌山市内で印刷業を営んでいた父・一雄は、1933(昭和8)年、母・楠枝と結婚した。しかし、母が肺結核を患つたため、鉛を使った活字の鉛毒を疑い廃業。郊外で養豚業を始めたが、豚コレラのため2年余りでこれも廃業。運よく母の病気も快癒。このころ弟2人(三郎と茂)は共産党の地下活動に入ったようだ。活動の詳細は不明だが、父は密かに資金援助や時には連絡係もしていたようである。

毎日新聞の初代檍原支局長に父・一雄は、1901(明治34)年生まれである。若いころ、そのヒューマニズムに共感、志賀直哉や武者小路実篤らに傾倒し、武者小路が宮崎県を開いた「新しき村」に2年余りいたこともある文学青年であった。そのため、長女篤子

力が極端に弱かつたため、役所などが出す細かい文字の統計等の判読には相当苦労したようで、分厚い天眼鏡を常に携帯していた。

1937(昭和12)年ころから、紀元二千六百年奉祝事業の一環として檍原神宮の大拡張が始まり、神域に指定された高市郡畝傍(うねび)町久米(くめ)、御坊(ごぼう)、畝傍の三大字は、その一部あるいは全部が強制移転の対象となつた。また、「八紘寮(はつこうりょう)」

という大規模な公営宿舎が造られ、全国から勤労奉仕の人々を迎えるとともに、神宮周辺(とくに久米)は料理旅館、カフェ、土産物店、写真館などが軒を連ね活況を呈した。この一大イベントを機に、毎日新聞も檍原支局を畝傍町久米に開設することになった。父は、その初代支局長として徳島から家族とともに赴任し、檍原の地に居をかまえた。

父は縁あって毎日新聞の記者となり、徳島支局勤務となる。しかし、父は視

7、父・林一雄のこと・②

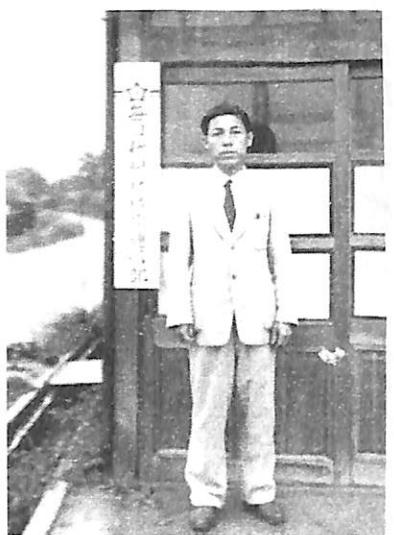
「大阪商科大学事件」は1943（昭和18）年、アジア太平洋戦争中の厳しい思想取り締まりのもとで起つた、学問の自由、思想・表現の自由に対する教員と学生らへの大規模な弾圧事件だった。この弾圧によつて、学生約100人が検挙され、教員4人、研究員嘱託1人、卒業生8人、学生33人が起訴された。また、獄死3人、発狂3人、釈放後の病死者数人を出した。

やがて敗戦、大阪市立大学や京都大学の学生を中心に父を慕う若者たちが、わが家には多く出入りしていた。とくに、父の「芭蕉講座」などは人気があったようだ。兄のいない私たち姉弟にとって二十歳前後の若者たちの存在はかけ替えのないものであつた。若者たちはよく、母の貧しい手料理で安酒を飲み、ロシア民謡などを歌つたりしたものである。

若者の中に、のちに大阪市立大学の経済学部長になる吉村勵（つとむ）氏（1922～2020）がいたことは特筆すべきだと思う。吉村氏は「大阪商科大学（現・大阪市立大学）事件」の犠牲者の1人だつた。



吉村勵氏（『労働者世界を求めて』日本評論社）より



1989年5月8日第三種郵便物認可 2021年7月15日「不屈」NO 565付録

8、父・林一雄のこと・③

町長の不正あばき
レッドページに

戦後、樅原支局は樅原通信部に格下げになつたが、父は樅原を動かず通信主任として毎日新聞記者を続けた。

だが、忘れもしない1950（昭和25年7月28日、GHQ（連合国軍総司令部）マッカーサー最高司令官によるレッ

ドページ（赤狩り）の指令により、毎日新聞大阪本社に呼び出された父は即日、馘首（かくしゆ）を言い渡されたのである。

実はこれには裏話があつた、と父に聞いている。当時、樅原神宮周辺は市制施行前で高市郡畝傍町であった。その畝傍町の町長が町民に配布しなければならない配給品を自宅の蔵に運び入れているとの情報を得た父は、その記事を書き始めた。それを察知した町長派は「錨（いかり）組」というやくざたちを送り込んだ。彼らは原稿を書いている父のデスクにドスを突き立てて、「やめろ」と脅しにかかつたが、父は動じなかつた。そこで町長派は、「林記者はアカである」とGHQに内報したのである。

第2次大戦後、世界は資本主義国と社会主義国の対立が激化し、アメリカとGHQは明確な反共路線へと転換し

「毎日新聞社樅原通信部」
兼自宅前に立つ 父・林一雄

1989年5月8日第三種郵便物認可 2021年7月15日「不屈」NO 565付録

未決勾留は2年を超え、終戦後の4年9月に執行猶予付きの懲役刑（刑期不明）の判決が下つた。過酷な取り調べと長期の未決勾留で、前歯のほとんどを失つたと聞いている。

吉村氏が林家に入りしていた時期は、終戦直後の大學生活後半のころで、吉村氏によく懐いていた。直子も社会人となり疎遠となつたが、年賀状の交換だけは続いていた。吉村氏の頭の中に吉村氏は姉・直子を可愛がり、直子もはずつと幼児扱いだつたというのも微笑ましい。

吉村氏は2020年1月、97歳の生涯を閉じられたと聞く。ご冥福をお祈りする。

さらに日本政府は、報道機関、官庁、国鉄、教育機関、大企業などで、総数約3万人ともいわれる労働者の追放（解雇）を行つた。同じ頃アメリカではマッカーサー旋風が吹き荒れており、証拠も何もなしで進歩的な学者や俳優たちが社会から抹殺されていた。

その後、父は突然の失業に妻と3人の子どもたちを養うため、知り合いの生理用品製造会社の社長に頼み、主に長野県の女子高校等を回つて生理用品を販売した。父は若い頃、宮崎県にあった武者小路実篤氏の「新しき村」に2年余りいたことがあり、高校の国語の先生など芭蕉や一茶、もちろん志賀直哉や武者小路実篤らの文学論に花が咲き、「文学談義」で意気投合、商品はよく売れたと話してくれたことがある。

9、父・林一雄のこと・④ 詩集『埋火（うもれび）』を遺す

その後(1953・4年頃)読売新聞の大坂進出を機に、父はベテラン記者を求める読売新聞から声が掛かり採用された。毎日新聞と同じく樺原通信部主

生前、藤森成吉氏ら父を理解してくれる作家らに詩集を贈呈していたようだ。亡くなつて1週間ほど経つて、京都在住の随筆家岡部伊都子氏から母のもとに電話があり、「詩集を読ませて頂きました。感動しました。ぜひ、林さんとお会いしたく思います」とのこと。母は絶句して「林は、ほんの先日亡くなりました」と答えた。岡部氏は大いに驚かれ、せめて靈前にお参りしたいとのことで、数日後來訪された。



詩集『埋火』 林一雄

権力がギヤングの手に帰した瞬間から
これに従順なすべての
善良らしい
有徳らしい
まともらしい
およそ要領のよい手合いの本性とは
じつはギヤングの片割れなのだ

ギャングさん

生まれてはじめて
指に指輪というものをはめた
はばかりながら

こいつは白き純アルミニームのしろものである
ホー・チ・ミンの国ベトナムの人びとが
撃ち落とした怪鳥B5の残骸から
手づくりにして送つてよこした
言語に絶するかれらの苦しみと
光輝あるそのいきおしを思うにつけ
これは手離せない
金よりもダイヤよりも
白きこのかがやきはかれらの誇り
わがはげましといましめである

任となつた。当時は55歳定年が一般的で、父に残された任期は2・3年であったが、嘱託で60歳を過ぎるまで働き続けてくれたことは、ありがたく忘れ難い。

また、父は新聞記者として働きながらも詩作を忘れなかつた。父は自分の生きた証しは文学作品を残すことだと考えていたようで、それは亡くなる2カ月前『埋火』という自費出版の詩集によつて実現した。

10、林茂(父の末弟)のこと ①

治安維持法違反で
検挙・起訴される

林茂は、兄の三郎に続いて党活動に入る。父は歳の離れた弟ということ特に可愛がつたようで、彼も「あにさん、



(林家所蔵)

無題 林茂

（林家所蔵）

（林家所蔵）

あにさん」と慕い、戦後も度々わが家を訪れている。

戦前、茂は東京の師範学校(豊島師範)を卒業後、東京高等師範学校附属小学校の教師となり、芥川比呂志、也寸志兄弟を教えたとも聞いている。その後、共産党の地下活動に従事し、1935(昭和10)年ころ、偽装夫婦として生活を共にしていた喜志江(こののような女性をホームキーパーと呼んだ)と結婚、長女夏子、次女章子、長男順吉の3児に恵まれる。

『特高月報』(昭和7年12月分)によれば、林茂は日本共産青年同盟(同盟)加入や日本労働組合全国協議会(全協)交運大阪支部常任委員として活動したことにより、昭和7(1932)年12月5日(23歳のとき)検挙され、翌年5月2日起訴されている。

その後、どんな経緯があったのか、兄

一雄と同じ毎日新聞の記者として大陸

に派遣され、満州(現中国東北区)のハルピンで終戦を迎えていた。その頃の逸話として聞いているのは、現地のホテル経営者など実業家たちと大きな賭けマジックをし、大勝ちしてフォードの自動車をせしめたことがあつたそうだ。この車は敗戦で満州を脱出する際、大いに役立つたと聞いている。

満州から引き揚げてきた叔父一家は、父一雄を頼って樺原にやつってきた。一時、わが家は双方の家族と祖母合わせて11人となり、とても賑やかであった。その後、中国貿易に関わる業界紙の会社を経営し、大阪出張等の折、たびたび父一雄宅を訪れていたので、大変よく11人となり、とても賑やかであった。その後、どんな経緯があつたのか、兄

の家に掛かっている。

また、叔父は趣味の域を超えるほど絵がうまく、故郷和歌山の海岸の桃林を遠景に麦畑を描いた油絵は今も友雄

の家に掛かっている。

11、林茂(父の末弟)のこと・②

大叔母・福めぐり、叔父・茂の消息が判明

わたしたち姉弟からいえば大叔母・茂からは叔母にあたる竹本福(1886~1965)をめぐり、叔父・茂の戦後の消息が一部判明した。

福(フク)と結婚相手のチェコ人カレル・ヤン・ホラとの関係などについては、「16、大叔母・福(フク)のこと」(17頁)に譲るが、ここでは東京の元高校教諭・

吉澤胎子氏が、チェコの研究者からフク・ホロヴァー(竹本福)の出自の調査を依頼され、国内はもとより欧米など諸国を訪れ、福の子孫や知人に会うなど資料を収集。15年かけて『ボヘミアに生きた明治の女 フク・ホロヴァーの生涯を追つて』(吉澤胎子 草思社)という一冊の書籍を成した。以下、同書より引用させていただく。

同書の執筆中に、『朝日新聞』がフクについての記事を特集、情報提供を呼びかけた。掲載されたのは1989(平成1)年9月8日付で、【海を渡つた「元気印」明治の女】という大見出しをつけた8段抜きの大型記事だった。大きな反響があつたが、そのなかにS・H生のイニシャルだけで、住所が書いていない手紙があつた。

…九月八日付、竹本フクさんの記事、懐かしく拝見しました。私の母の千代乃はフクさんの姉にあたります。私たちは

13

ち(フクの甥や姪)は母親から、「あの人はチェコで反ナチス運動に参加したらしこから、おそらくナチスに消されたでしょう」と聞かされていたのです。そのフクさんは思いませんでした。私たちのいとこがチェコに生きていることを知つて、懐かしく、うれしく思いました。…

そして、フクの父・竹本久敬(ひさよし)は紀州藩士で、藩校の国学教授、勤王の志士として活躍したことが書いてあつた。吉澤氏は著書に、フクの調査の「突破口となつたS・H氏からの手紙」「フクの親族がついに見つかつたのだ!」その感激はひとしお深いものがあつた」と書いたほどの感激ぶりだった。

では、S・H氏とは誰なのか? ここで

までくれば、わたしたちの叔父・林三郎のか茂しかないだろう。どちらもS・Hなのだ。しかし、三郎は1971年に死去しており、『朝日新聞』(1989年9月

8日付)のフクの記事を読むことはできない。したがって、情報提供の手紙を書いたのは、林茂・叔父であることは間違いない。わたしたちは、吉澤恵子氏の著書から、三郎叔父がその時点では健在

だつたことを逆に知ることができた。後年、吉澤氏は大阪で、フクやホラゆかりの大坂日赤や阪大病院などを調査し、その足で和歌山に行き、宮尾久子さんに会つてS・H氏のことなどを聞き取っている。宮尾久子さんは祖父母・林直吉と千代乃(福の姉)の長女・清穂の子である。そして、吉澤氏は「S・H氏は、戦前、『毎日新聞』の記者をしていた林茂氏であった。彼は戦前の共産党員で、治安維持法違反で投獄されたこともあり、親族とは交際していなかつたので、福(フク)のことはほとんど知らなかつたら名乗らなかつたのだろう。」と、その著書で述べている。

1989年5月8日第三種郵便物認可 2021年7月15日「不屈」NO 565付録
1989年5月8日第三種郵便物認可 2021年7月15日「不屈」NO 565付録

いたのは、林茂・叔父であることは間違いない。わたしたちは、吉澤恵子氏の著書から、三郎叔父がその時点では健在だつたことを逆に知ることができた。後年、吉澤氏は大阪で、フクやホラゆかりの大坂日赤や阪大病院などを調査し、その足で和歌山に行き、宮尾久子さんに会つてS・H氏のことなどを聞き取っている。宮尾久子さんは祖父母・林直吉と千代乃(福の姉)の長女・清穂の子である。そして、吉澤氏は「S・H氏は、戦前、『毎日新聞』の記者をしていた林茂氏であった。彼は戦前の共産党員で、治安維持法違反で投獄されたこともあり、親族とは交際していなかつたので、福(フク)のことはほとんど知らなかつたら名乗らなかつたのだろう。」と、その著書で述べている。

政子と宮川洋との 短い邂逅^{かいこう}

林家の2女・政子と経済学者・宮川洋(みのる)氏(後出)の長男・洋(ひろし)

は、1944(昭和19)年8月4日に結婚した。おそらく、そうした社会通念を乗り越えなければならない理由と信念、愛情があつたのだろう。

ところが洋は、1945(昭和20)年7月24日、当時の中華民国上海市徐家癒所属隊で死亡する(「徐家癒」は、地名なのか所属隊名なのか不明。また、戸籍簿には、単に「死亡」だけで「戦死」とは記載されていない)。享年25歳だった。宮川洋と林政子の結婚について、わたしたち姉弟が父母から聞いていたのは次の通りである。医学生だった宮川「博」(わたしたちは「博」と聞いていた。以下、「洋」と表記)と政子は婚約者同士だった。ところが、洋は学徒出陣で中国大陸に送られ、中国の共産党員と接触しているところを憲兵に見つかり、射殺されてしまった。



宮川洋と林政子 (撮影年不明、林家提供)

洋の父・宮川實氏(1896~1985)は、東京帝国大学を卒業後、同志社大学講師、和歌山高等商業学校の教授となる。この間に、河上肇とともに『資本論』の翻訳を始める。1939(昭和14)年、立教大学教授に就任するが、42年に治安維持法違反で入獄、戦後復職した。その後、労働者教育協会創立に参加、後に会長を務める。そのかたわら、マルクス経済学の著書、翻訳書などを多数出版、青年労働者に大きな影響をあたえた。

の多い職場で、やがて土方(ひじかた)敬太と出会い結婚した、とわたしたち姉弟は父母から聞いていた。

しかし、のちに政子の義母となる土方梅子は、その自伝に次のように記している。戦後、義母・梅子は生活費を稼ぐため本格的に洋裁をやるようになつた。梅子のまわりには、洋裁を習つたり手伝つたりする人がたくさんいた。「そのなかに、経済学者の宮川實さんの子息と結婚して、夫を戦争に奪われた人がありました。その人――政子は、やがて、私の長男、敬太と恋愛し、結婚まで進みました(『土方梅子自伝』)。」

経緯に若干の違いがあるものの、1948(昭和23)年、政子と敬太は結婚する。どちらも再婚同士だった。そして、一男一女を授かるが、長男・太平は夭折、長女・たまよが土方家を継いだ。

戦後、政子は兄の一雄の親友だった脚本家・映画監督の小国英雄の紹介で映画撮影所に入り、スクリップター(記録係)として働いた。撮影所は演劇関係者

12、叔母・政子のこと・①

13、叔母・政子のこと・②

政子、土方敬太と結婚

戦後、政子は兄の一雄の親友だった

脚本家・映画監督の小国英雄の紹介で映画撮影所に入り、スクリップター(記録

係)として働いた。撮影所は演劇関係者

を多数出版、青年労働者に大きな影響をあたえた。

14、叔母・政子のこと・③

義父・土方与志は新劇運動の旗手

政子の義母・土方梅子(1902~73)は、1918(大正7)年に与志と結婚、

築地小劇場の創設に関わり、妻として築地小劇場を創設するなど、日本の新劇運動を牽引した。

梅子夫妻の長男で、幼少期に父母のソ

1933(昭和8)年、与志は家族とともにソ連を訪れ。国際演劇オリンピアードや第一回ソビエト作家同盟大会に参加した。そこで的小林多喜二虐殺の真相を訴える演説や、日本共産党への多額のカンパなどを理由に、宮内省より爵位(しゃくい)剥奪(はくだつ)の処分を受けた(与志は『赤い伯爵』と揶揄された)。逮捕を逃れるため土方一家は帰国せず、そのまま亡命。しかし37年、一家はスターリン肅清によって国外を建てる》と恋に落ち、結婚。横浜の「港

がら入院したが、生きてこの書斎を使うことにはなかつたという。

16、大叔母・福(フク)のこと

原爆ドーム(広島物産陳列館)の設計・建築に携わったチエコ人と結婚

わたしたちの祖母千代乃の妹・福(フク)について少し触れたいと思う。1905(明治38)年、福は大阪赤十字病院の看護婦をしていて、腸チフスで緊急入院してきたチエコ人カレル・ヤン・ホラ(大阪ガス供給部長。その後、ヤン・レツルとレツル・アンド・ホラ建築会社を設立し、広島物産陳列館(現・原爆ドーム)など



1936年モスクワにて。左より土方与志、与平、梅子、敬太。(『評伝 演出家 土方与志』津上忠新日本出版社より)

1933(昭和8)年、与志は家族とともにソ連を訪れ。国際演劇オリンピアードや第一回ソビエト作家同盟大会に参加した。そこで的小林多喜二虐殺の真相を訴える演説や、日本共産党への多額のカンパなどを理由に、宮内省より爵位(しゃくい)剥奪(はくだつ)の処分を受けた(与志は『赤い伯爵』と揶揄された)。逮捕を逃れるため土方一家は帰国せず、そのまま亡命。しかし37年、一家はスターリン肅清によって国外

1933(昭和8)年、与志は家族とともにソ連を訪れ。国際演劇オリンピアードや第一回ソビエト作家同盟大会に参加した。そこで的小林多喜二虐殺の真相を訴える演説や、日本共産党への多額のカンパなどを理由に、宮内省よ

退去を命じられ、フランスに移る。41(昭和16)年、逮捕覚悟で帰国。与志は横浜港で下船と同時に治安維持法違反で逮捕、拘禁される。裁判の結果5年の懲役刑を受け、翌年、豊多摩刑務所に下獄。45年7月、宮城刑務所に移されたが、敗戦により同年10月釈放された。

戦後の土方与志は、堰を切つたように新劇運動、演出活動に全力を傾けた。また、前進座の顧問となり、前進座が上演した多くの作品を演出した。

わたし友雄は、学生時代に一度だけ叔母の政子に会っている。1964(昭和39)年3月、奈良学芸大学地理学研究会の東北巡検の帰途のことだった。土方家に「お邪魔したい」と電話をすると、

15、叔母・政子のこと・・・④

林友雄、政子宅を訪問

わたし友雄は、学生時代に一度だけ叔母の政子に会っている。1964(昭和39)年3月、奈良学芸大学地理学研究会の東北巡検の帰途のことだった。土方家に「お邪魔したい」と電話をすると、

改札口を出ると、本当にすぐ分かつた。ヒョウ柄ではなく、本物の毛皮だ。庶民に手が届くような代物ではない。それを見透かしたように、「もと華族の人たちが、時々バザーをするの。家にあらゆるものをお出品するの。だから、値段は格安。みんな、良いものを出品するのヨ。」

荻窪駅から土方家までは徒歩数分で、巨木の生い茂る豪邸だった。その晩は泊めてもらうことになり、存命だった土方梅子らと夕食をともにした。

また、多くの演劇人や映画人が、土方与志に寄贈した書斎を見せてもらつた。書斎は6坪ほどの広さで、与志自身が設計図を書き、完成を楽しみにしながら、



『フク・ホロヴァーの生涯を追つて』
(吉澤貞子 草思社 2002年)

政子は「中央線の荻窪駅で待っているから」と歓迎の言。

しかし、初対面なので「お顔も知らないし、何か目印でも」というと、「ヒョウ(豹)の毛皮のコートを着て行くので、すぐ分かるわヨ。」

改札口を出ると、本当にすぐ分かつた。ヒョウ柄ではなく、本物の毛皮だ。庶民に手が届くような代物ではない。それを見透かしたように、「もと華族の人たちが、時々バザーをするの。家にあらゆるものをお出品するの。だから、値段は格安。みんな、良いものを出品するのヨ。」

荻窪駅から土方家までは徒歩数分で、巨木の生い茂る豪邸だった。その晩は泊めてもらうことになり、存命だった土方梅子らと夕食をともにした。

また、多くの演劇人や映画人が、土方与志に寄贈した書斎を見せてもらつた。書斎は6坪ほどの広さで、与志自身が設計図を書き、完成を楽しみにしながら、

政子は「中央線の荻窪駅で待っているから」と歓迎の言。

その大姉の生涯を記した『フク・ホロヴァーの生涯を追つて』(吉澤貞子 草思社)という一冊の本が2002(平成14)年に出版され、フクの孫がヨーロッパに存命であることが判明した。やがてその本の著者・吉澤貞子氏からわたしたち姉弟に、フクの孫たちが自分たちのルーツを訪ねたいと言つてゐる旨の連絡が入つた。そして16年前、奈良ホテルでダイアナとフィオナというイギリスから来た二人の女性と会つた。

ダイアナはその後2度来日、わたしたちと親交を深めている。二人の外見はまったく白人であるが、ダイアナは小さい時から黒髪だったそうで、「日本人の血なんです」とうれしそうに話したのが印象的であつた。

の園長を命じられた。本人は最後まで子どもたちと接することができる「平教諭」でいたかったので、申請するだけで取得できる1級免許を取らず、市教委の再三の催促にも折れず、最後まで2級免許のまま園長を続けた(奈良女子大の幼稚園教諭養成課程は2年制であったため免許は2級)。法令では、園長は1級でなければならない。市教委は特例を適用)。1990(平成2)年、母・楠枝が大腸ガンになり、直子は早期退職して介護に専念、最期を見取った。

「檍原市9条の会」も発足から16年目に入った。わたし友雄は教職を退いた16年前から世話人をしている。姉直子にも呼びかけ、地域9条の会(畝傍)の世話人の役目を果たしてもらっている。今の政治情勢から、憲法の平和条項が重大な危機に瀕していることは明らかである。



『しんぶん赤旗』ひと欄
(2019年3月5日号)



(丁)

の園長を命じられた。本人は最後まで子どもたちと接することができる「平教諭」でいたかったので、申請するだけで取得できる1級免許を取らず、市教委の再三の催促にも折れず、最後まで2級免許のまま園長を続けた(奈良女子大の幼稚園教諭養成課程は2年制であったため免許は2級)。法令では、園長は1級でなければならない。市教委は特例を適用)。1990(平成2)年、母・楠枝が大腸ガンになり、直子は早

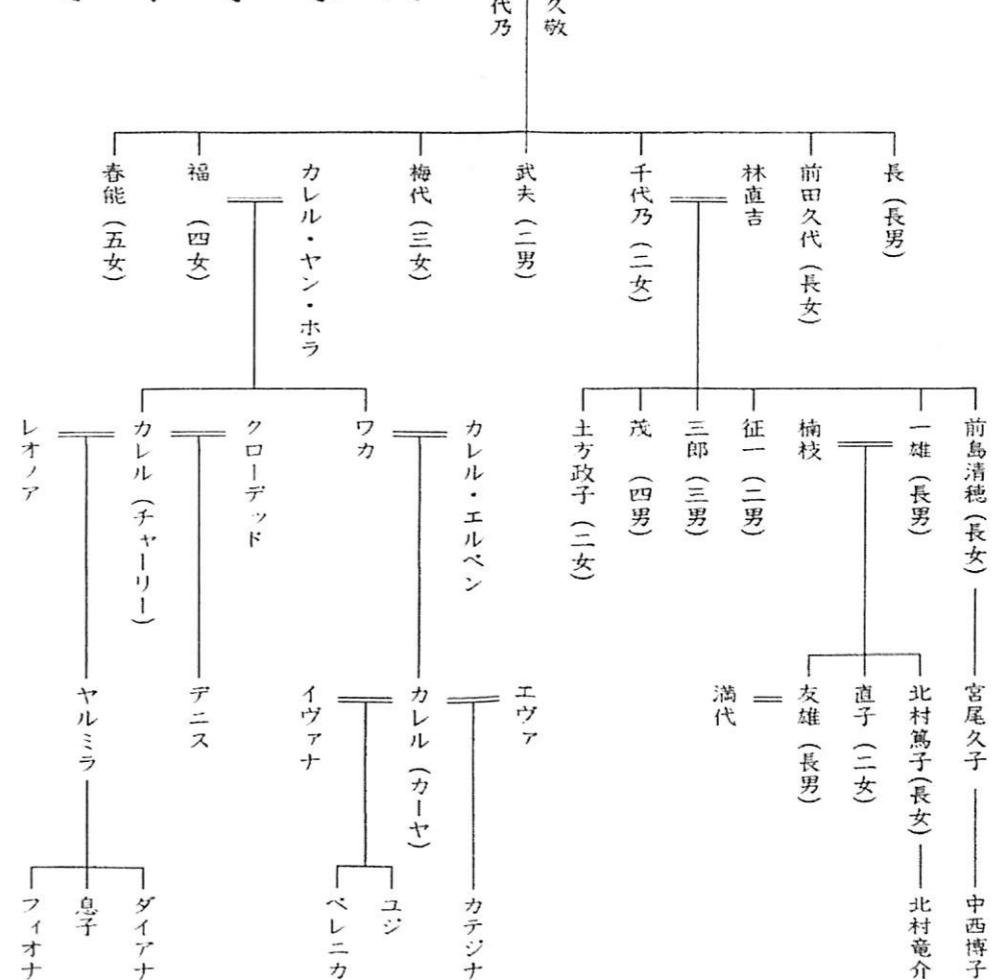
期退職して介護に専念、最期を見取った。

どんな不条理、不正も頬被りしてやり過ぎ)そうとする政権の姿勢は憤りを通り越して呆れてしまう。

しかし、地道な取り組みを一步一歩積み重ねて行くしかない。わたしたちも毎月1回、市世話人会と地域世話人会を開き、その決定に基づき毎年秋には著名人を招いた講演会や反戦の映画会を開いたりしている。また、年に数度近鉄大和八木駅前集会を開いたり、毎月

第1次安倍政権時の教育基本法改悪に始まり、教育の中身においても、史実に基づかない記述の押し付け、例えば慰安婦問題、沖縄集団自決、南京虐殺など枚挙に暇がない。教科書ネットを通して多くの人々に知らせ、警鐘を鳴らし続けたいと思っている。姉直子も私と共に9条の会、教科書ネットの活動を続けたいと思っている。

竹本家系図



わたしたち姉弟三人は、厳しい家計の中にあるても、それぞれ大学教育を受けることを許された。長姉篤子は大阪学芸大学、次姉直子は奈良女子大学、友雄は奈良学芸大学(在学中に奈良教育大学と改称)へ進学した。いずれも、下宿を要しない国立大学だった。篤子のみは教職に就かず3年ほど商社勤めの後、父の同僚記者と結婚。幸せな暮らしが続いたが、2000(平成12)年からしが続いたが、2000(平成12)年、直子は1960(昭和35)年、奈良女子大学文学部幼稚園教諭養成課程を卒業、檍原市立今井幼稚園を振り出しに数園で勤務。1978(昭和53)年からは、本人の意に反して白檍南幼稚園食道ガンのため死去した。

直子は1960(昭和35)年、奈良女子大学文学部幼稚園教諭養成課程を卒業、檍原市立今井幼稚園を振り出しに数園で勤務。1978(昭和53)年からは、本人の意に反して白檍南幼稚園

地道な取り組み進める

林姉弟

17、16年目に入った「9条の会」の活動

参考文献・資料

- 『奈良県の治安維持法犠牲者名簿（第一次刊行）』編集・発行＝治安維持法犠牲者國家賠償要求同盟奈良県本部 2016年
- 『和歌山県の治安維持法犠牲者（第2版）』編集・発行＝治安維持法犠牲者國家賠償要求同盟和歌山縣本部 2013年
- 『特高月報』内務省警保局保安課 1930年3月～44年11月
- 『思想月報』司法省刑事局思想部 1934年9月～44年6月
- TV番組『自由はこうして奪われた—治安維持法10万人の記録』
- NHK ETV特集取材班
- 『証言治安維持法「検挙者10万人の記録」が明かす真実』ETV特集取材班・
- 萩野富士夫NHK出版新書
- 『奈良民報』第2359号 2018年11月11日付
- 『治安維持法検挙者の記録—特高に踏みにじられた人々』小森恵著
- 西田義信編 文生書院 2016年
- 『不届のあしあと（治安維持法下の体験 第2集）ある金属労働者の回想』
- 楠山通 治安維持法犠牲者國家賠償要求同盟大阪府本部発行 1992年
- 『抵抗の群像（第一～三集）』治安維持法犠牲者國家賠償要求同盟編 治安維持法犠牲者國家賠償要求同盟発行 2008～18年
- 『労働者世界を求めて』（吉村勲先生還暦・退官記念論集）日本評論社 1965年
- 『労働者世界—未だ叶わぬ吉村勲の夢』福田義孝 「経済学雑誌」第101巻 第1号所収 2000年
- 『大阪商大事件の真相』上林貞治郎 日本機関紙出版センター 1980年
- 『大阪商大事件の覚え書き』広川禎秀 「人文研究」第27巻第7分冊所収 1975年
- 『大阪市立大学百年史』同編集委員会 大阪市立大学 1987年
- 『大阪商大事件と二瓶正夫—二瓶正夫「夜明けを前にして—私の道程—」によせて』広川 禎秀 「大阪市立大学紀要」第5号所収 2012年
- 『朝鮮戦争の正体』孫崎享 祥伝社 2020年
- 『平和新聞』2237号 日本平和委員会 2020年7月25日
- 『レッドページ』梶谷善久編 図書出版社 1980年
- 『一九五〇年七月二八日：朝日新聞社のレッドページ証言録』朝日新聞社レッズドページ証言録刊行委員会編 晩聲社 1981年
- 『新聞戦後史：ジャーナリズムのつくりかえ』荒井直之 中央公論新社 1972年
- 『毎日新聞七十年』社史編纂委員会 每日新聞社 1952年
- 『戦後史の汚点 レッドページ GHQの指示という「神話」を検証する』明神歟 大月 書店 2013年
- 『土方与志 ある先駆者の生涯』尾崎宏次 茨木憲 筑摩書房 1961年
- 『評伝 演出家 土方与志』津上忠 新日本出版社 2014年
- 『土方梅子自伝』土方梅子 早川書房 1976年
- 『埋火』林一雄 明日香詩社 1974年
- 『フク・ホロヴァーの生涯を追って ボヘミアに生きた明治の女』吉澤胎子 草思社 2002年
- 『写真集 日本共産党の半世紀 創立から74年参院選での躍進まで』日本共産党中央委員会出版局 1982年
- 『日本共産党の六十年 1922～1982』日本共産党中央委員会出版局 1982年
- 『写真記録集 日本共産党の60年 1922～1982』日本共産党中央委員会出版局 1983年
- 『日本共産党の七十年 1922～1992』（上・下・党史年表）日本共産党中央委員会出版局著 新日本出版社発行 1994年
- 『日本共産党の八十年 1922～2002』日本共産党中央委員会出版局 2003年
- 『しんぶん赤旗』2019年3月5日付
- 『奈良刑務所物語』2016年増補版 編集・発行＝治安維持法犠牲者國家賠償要求同盟奈良県本部 2016年
- 『奈良刑務所物語—治安維持法で囚われた人々』編集・発行＝治安維持法犠牲者國家賠償要求同盟奈良県本部 2020年